

第四章 ブルジョア観念論的傾向

「その思想闘争の結論と成果をもって、私たちは作戦を遂行します。その結論とは『人間が変わる』という確信です。人間は必ず変わります。……日本共産主義運動も国際共産主義運動も、人間が変わるという観点から必ず統一できると確信します」(A)

人間は変わるVというテーゼは、ブルジョア観念論哲学も認めるものであり、それ自体は何ら革命的な人間観ではない。問題は、日本赤軍いうところの現実の日本人民はいかなる存在であり、どのような主体へと向かって変革していかなければならないのかという点にある。日本赤軍いうところの日本人民は、皇軍兵士にもなれば反日兵士にもなり得る存在なのである。そしてこのいずれの方向に目的意識的に変革していくのかという点で、帝国主義者と共産主義者は決定的に対立するのである。日本赤軍は、帝国主義者とも共有し得る人間は変わるVというテーゼを連呼するだけで、帝国主義的寄生虫たる日本人民をいかにして世界革命主体へと変革するのか、その具体的方法と経路を示さないことによって、ブルジョア観念論哲学の立場に立っている。帝国主義者・ブルジョアジーとも共有し得る、抽象的一般的「人間変革可能」論で共産主義運動を統一できるなどというのは空論中の空論である。

「共産主義は最も人間主義の思想であり、敵帝国主義の思想である人間憎悪の思想や虚無思想とは全く相い入れないものです」(B 46 P) 「私たちは人間を物の価値におきかえる敵の思想、人間よりも物を第一とする思想におかされていました」(B 67 P) 「革命の根本は人に対する働きかけであり、人を第一とする労働者階級の思想を持ちえない限り、物を第一とするブルジョア思想に敗北していきま」(B 88 P) 「帝国主義は人間憎悪思想そのものであり、個人的な利益の中で人間同士を競争させている社会だからです」(B 110 P) 「労働者階級の立場、ものの見方、考え方、作風は人間を第一とする思想であり、資本主義の物を第一とする思想とは相容れません」(B 133 P)

ここでも日本赤軍はブルジョア観念論哲学を表明しているが、それを定式化すれば次のようになる。敵帝国主義・ブルジョア・資本主義社会の思想Ⅱ「物を第一とする思想」「人間憎悪」。共産主義・労働者階級の思想Ⅱ「人間主義」「人間を第一とする思想」。すなわち人間Vと人間Vとの二元論哲学である。しかし、「物を第一とする思想」と「人間を第一とする思想」は、ブルジョア・イデオロギーというメダルの表と裏にすぎない。物と人間とを対立させるだけで、その対立の根拠を説明せず、「物対人間」という枠組の中でどちらか一方を優位におくという発想自体ブルジョア・イデオロギーなのである。

共産主義とは「人間主義」でもなければ、「人間を第一とする思想」でもない。共産主義とは、人間を自然の征服者とする人間第一主義を否定する。共産主義とは、人間と人間との間の、個と類との間の、人間と自然との間の対立抗争の真の解決であり、人間と人間との、個と類との、人間と自然との共同体的一体性の完成である。この意味において、共産主義とは、自然主義に貫徹された人間主義であり、人間主義に貫徹された自然主義であり、完成した自然主義としての人間主義であり、完成した人間主義としての自然主義である。

共産主義においては、もはや物と人間との対立は存在しない。この共産主義は感性的経験的土台を欠いたユートピア的観念ではない。われわれは、この共産主義の原型を、人類三〇〇万年がつくり出し完成させた原始共産制の裡に発見し復権し、新たな次元で完成させる。われわれは自然と人間との一体的共生の内懐の中での人間と人間との自由平等な共同体的関係を、共産主義の理念的原型とし、原始共産制・農耕共産制の内在的矛盾の、搾取階級制・植民地支配の否定を媒介した、革命的止揚として、世界共産主義を指定する。我々は、この根源的方向性において、共同体的人間観・自然観を構築する。晩年マルクスは、原始共産制・農耕共産制の研究によって、この方向性を予感しつつ展開し得ずに終わった。我々はこの根源的方向性を深化す

ることによって晩年マルクスをも乗り越える。
この我々の共同体的人間観に基礎づけられた共同体革命闘争史観からするならば、本源の共同体（原始共産制・農耕共産制）を失なっている日帝本国人プロレタリアートは、植民地支配・搾取階級制の廃絶へ向けた戦闘の中で、日帝本国人としてのオノレの歴史的現在の反革命性を自己否定しつつ、原始共産主義魂を字ぶことを通して、自己否定を民族性の止揚へまで貫徹し抜くことによってのみ、オノレを共産主義者へと自己変革し、全世界共産主義全人類共同体建設へ向けた世界革命主体として自己形成し得るのである。

第五章 路線転換の契機と根拠

第一節 「過渡期世界」論批判

日本赤軍の一国革命主義路線への右旋回の契機と根拠は何か？「赤軍派の世界認識（『パンフレット4』）に示される」を継承するものであった『世界同時革命』論は、私たちが具体実践として国際主義をもつて闘おうとすればするほど矛盾していきました」（B 110 / 111P）とあるように、その第一は「過渡期世界」論・「世界同時革命」論の観念性と国境を越える具体的武闘実践との矛盾である。

ところが、日本赤軍は、この矛盾を、「過渡期世界」論・「世界同時革命」論の根底的批判、新たな歴史観・世界革命観の確立の方向で克服するのではなく、没総括的放棄、一国革命主義寄せ集め世界革命論へのなし崩しの先祖返りとして解消しようとしている。

「過渡期世界」論・「世界同時革命」論の観念性を解く鍵はどこにあるのか。それは「プロレタリアートが本来世界的であり、プロレタリア革命はただ唯一世界プロレタリア革命であり……」（M 10P）「被支配階級としてのプロレタリアートは、過渡期世界突入を契機に世界武装プロレタリアートに成熟・到達し……」（M 10P）「かかる階級闘争は、より高次な能動的階級闘争として、世界武装プロレタリアートをして……世界革命を……単一の、永続的な論理的、時間的に同時なものとして成長発展せしめる。」（M 11P）「歴史の客体から主体へと転化しつつある世界武装プロレタリアートとしての世界プロレタリアート」（E 51P）「ボルシェヴィキとロシア革命が切り開いた世界プロレタリアートとしての世界武装プロレタリアートへの到達（成熟）」（E 51P）「（過渡期世界とは）世界武装プロレタリアートとして、歴史的実践的に到達した世界プロレタリアートが歴史の主体として登場し始めた世界である。」

（E 53P）とあるように、△世界武装プロレタリアートVという概念である。この△世界武装プロレタリアートVという主体概念こそ、「過渡期世界」論・「世界同時革命」論を根底から支え、成立させているキー・カテゴリーである。そして、この△世界武装プロレタリアートVという主体概念が、実体的裏付けのない幻の概念であることによつて、「過渡期世界」論・「世界同時革命」論は破産しているのである。ここにこそ、赤軍派破産の全秘密がかくされている。

赤軍派の△世界党△世界赤軍△世界革命戦線Vという組織路線もまた△世界武装プロレタリアートVの非実在性によつて実践的に破産している。この赤軍派の69年前段階武装蜂起の敗北から72年連合赤軍の敗北に至る実践的破産は、△世界武装プロレタリアートVの非実在性に対する反動から、赤軍諸派を、毛沢東主義を媒介としたスターリニズムへのなし崩しの先祖返り、一国主義・民族主義への右旋回へと押し流しており、唯一国境を越える武闘実践を堅持している日本赤軍もこの流れにとり込まれている。

結成時赤軍派は確かに、「過渡期世界」論・「世界同時革命」論の指定というかたちで、レーニン主義の待機主義的一国主義的限界をなんとかして克服せんとしている。こ

の方向性は一定評価できる。しかし、結局のところ、国家・民族廃絶の契機を把握することができず、従来のマルクス主義の地盤の上で、世界革命主体を「世界武装プロレタリアート」として指定することによって、観念論的に空転した。

「歴史は階級闘争の歴史で資本主義の成立以来、共産主義時代に到達する世界の全歴史的過程は、この階級闘争、永続的、非和解的なブルジョアとプロレタリアートの二大階級の闘争の歴史であり、その実践的な場であることを明白にしている」(M3P)とあるように、また「世界武装プロレタリアート」の指定の仕方に端的に現われているように、結成時赤軍派の「過渡期世界」論は、『共産党宣言』時のマルクスの世界観・歴史観・革命観をより純化するかたちで無批判的に継承している。

『共産党宣言』時のマルクスの世界観・歴史観・革命観は概略次のようなものである。すなわち、西欧封建社会の胎内から孵化してきた資本制生産様式が創出する物的生産力体系と地球を包摂しゆくその世界市場形成力こそが、東欧・アジアの「野蛮な世界」を破壊し、そこに西欧市民社会的階級対立をつくり出し、世界人口をブルジョアとプロレタリアートの二大階級に純化し、資本のインターナショナルイズムそれ自身が賃労働のインターナショナルイズムをつくり出し、かつ、そのことが共産主義社会建設の物質

的条件を即目的につくり出す。そして、世界市場として、地球全体を包摂しゆく資本の本国こそ、「世界の工場」ブルジョア的世界の造物主」としての英帝本国であり、英帝本国プロレタリアートこそ、世界革命の指導的主体である、というものである。

この「宣言」に現われているマルクスの世界観、資本主義を肯定・美化する自由貿易主義的世界観を基本的に継承するものであり、ブルジョア・イデオロギーの水準から一歩も抜け出ていない。マルクスにとって、非西欧世界は、西欧世界が必然的に侵略し、制圧し、植民地化してゆく受動的客体としてしか位置づけられておらず、原始共産圏の存在は無視され、被植民地原住民勢力の総反攻戦の存在はワイ小化され切り捨てられている。それ故、マルクスは、被植民地原住民勢力の世界規模での総反攻戦の中に、産業資本段階の世界帝国主義打倒に向けた世界革命の現実性を見る事ができず、西欧諸帝国の侵略反革命と西欧帝国本国プロレタリアートの反革命性を美化し容認し後押ししてしまっているのである。

我々は、このマルクスの自由貿易主義的世界観「西欧中心の階級闘争史観」先進国プロレタリア革命論を土台として「過渡期世界」論を構築するのではなく、このマルクスの世界観「歴史観」革命観を根底から破壊し、新たな世界観「歴史観」革命観を構築しなければならない。それは原

始共産圏と文明圏との対立闘争を深層構造とし、農耕共産制と搾取階級制との対立闘争、帝国主義侵略勢力と被植民地原住民勢力との対立闘争を中層構造とし、帝国本国・植民地内の階級闘争を表層構造として、地球世界全体を包括した重層重合的な共同体革命闘争史観を打ち立てることであり、この歴史観を土台に据え、現代世界観としての世界過渡期論を定礎し、現状分析として世界帝国主義論を確立し、それを前提として永続的世界共産主義革命論を形成することである。

第二節 日本国内武装革命主体の形成

日本赤軍の一国革命主義路線への右旋回(第二)の契機と根拠は次の点にある。すなわち、「私たちは日航ハイジャック闘争、シンガポール・クウェート連続闘争を経る中で、自力更生を、リッター闘争とそれ以後の闘いの地平から確立することをめざしました。しかし、私たちは国内に対して諸組織の統一をめざす建党・建軍の提起にとどまり、主体的な国内組織化の弱さゆえに、陣型の現実的弱さを克服する基盤と再生産構造をもちえませんでした」(B96P)とあるように世界を戦場とした国境を越える武闘実践が「国内母体建設」とリンクし得ないというアセリである。この限界を、日本赤軍は、国内向け、人民戦線的な幅広主義戦術として解決しようとしているが、破産することは目に見え

ている。

日本赤軍の77・5・30路線転換に対して、人民新聞紙上に「歓迎・支持」の意見がいくつか表明された。しかし、9・28ダッカ闘争後、この5・30路線転換「歓迎・支持」層の中からH・J闘争への疑問・失望が提起されている。路線転換は「歓迎・支持」、H・J闘争は反対というこの混乱は、決して受けとめ手たちの混乱ではなく、日本赤軍の路線自体の矛盾であると、我々は考える。

日本赤軍が「国内母体建設」を言うならば、先ずなによりも、日本赤軍のかつての出身母胎であった国内赤軍派が、半蜂起主義的武闘↓被弾圧↓武闘放棄↓大衆運動主義への転向↓四分五裂という過程をたどって現在あるということの根底的な総括がなされねばならず、それ抜きには「武闘闘争を軸とした団結」も説得力をもたないだろう。

日本赤軍はきわめて抽象的な一般的なレベルでは確かに、「なぜ武装闘争なのか」を述べている。例えば「武装闘争は敵を武装解除し、人民の権力を樹立していくことを目的とする」(N)「武装闘争とはだれもが共に仕合わせに生きるために、それを阻害している今の支配者たちを歴史の舞台から引きおろすための手段です」(D)と。しかしこれではとうてい、H・J闘争をテロリズムと罵倒する大衆運動主義者や「いつか蜂起する」主義者を批判し得ないし、日本赤軍の人民の武装闘争への決起を克ちとすることはできな

い。

パレスチナ・アラブでは、武装闘争は日常化しており、日常生活そのものと化しており、人民が武装闘争に決起することを妨げる大衆運動主義者・日和見主義者が存在する余地はなく、理屈抜きに武装闘争が正しいことを人民は実感するだろう。だが、日帝本国は、被植民地人民からの収奪による経済的政治的余裕によって、人民の諸要求を体制内に集約する合法的チャンネルをいくつも、地域末端にまでも設定しており、また、この合法的チャンネルに寄生する合法主義者・大衆運動主義者・日和見主義者がうじゃうじよいるために、武装闘争がストリートに受け入れられない。この日帝の統治構造をとらえ切り、これを打ち破る路線こそ問われている。

結成時赤軍派はレーニン主義の待期主義的受動的限界を克服しようとして、攻撃型階級闘争論を指定した。しかし、これは第一に「攻撃性」の根拠をロシア革命を契機とした世界武装プロレタリアートの登場に規定された過渡期世界の高次の自然発生性なるものに基礎づけている点で、第二に「なし崩しファシズム」前段階武装蜂起」というかたちで、レーニン主義的な蜂起論を清算し切れておらず、基本的には継承してしまっており、武装闘争を都市ゲリラ戦として純化し得ていない点で破産している。

我々にとって、日帝を否定していくのみならず、日帝本

国人（日本人）としてのオノレの在りようをも否定していくところの反日闘争は、なぜ反日武装闘争を軸としたものでなければならぬのか。

我々は、革命情勢が熟柿の落ちる如く自然成長的に訪れるのを待ち、それまでは改良闘争と党建設に専念し、革命情勢がやってきたら「一瞬の武装蜂起」権力奪取」をやるというレーニン主義の待期主義的受動的革命論を、すでにその破産が歴史的に実証されたものとして否定し、平時（非革命情勢）から武装闘争によって革命情勢を主体的につくり出すという攻撃型革命論の立場をとる。この攻撃型革命論の立場が、反日武装闘争でなければならぬ第一の根拠である。

我々は、革命の集約的問題は権力問題であり、かつ革命権力とは「一瞬の蜂起」によって敵から奪うものではなく、革命闘争の過程それ自体が主体的につくり出すものであるという主体的権力論の立場をとる。そして、権力問題の具体的環とは武装の問題であるが故に、革命闘争は武装闘争でなければならぬ。この主体的権力論の立場が、反日武装闘争でなければならぬ第二の根拠である。

我々は、被植民地人民の革命闘争への呼応・合流という戦略的組織路線によって、帝國本国内の革命闘争と被植民地人民の革命闘争との同質化、そしてそれを前提とした世革革命Ⅷ軍Ⅴの建設を追求しなければならないという

組織論に立っている。そして、この同質化を獲得し得るのは反日武装闘争以外にないのである。このⅧ呼応・合流Ⅴという戦略的組織路線が、反日武装闘争でなければならぬ、第三の根拠である。

我々は、革命闘争とは、単に客観情勢の変革過程ではなく、主体そのものの変革過程であるという客体⇄主体の相互変革の弁証法的立場をとっている。革命主体の共産主義的変革、その前提としての日帝本国人としての歴史的現在の反革命性の自己否定は、日帝との非和解的關係を主体的に創出する武装闘争によってのみ貫徹される。これが反日武装闘争でなければならない、第四の根拠である。

第三節 完結しうる組織とは？

日本赤軍の一国革命主義路線への右旋回の第三の契機と根拠は、次の点にある。すなわち「自力更生を日本赤軍として自己確立していく闘いであった第二次建軍運動が開始されたばかりの時、私たちの根拠を更に問う敗北がありました。それは、ストックホルムでの二同志の被逮捕、強制送還、そして日帝権力への屈服、自供としてあらわれた問題です。これが私たちの団結の質、勝利の確信の質を根本的に問う敗北でした。武装闘争の勝利貫徹の中で、敵に作られた幻想の中に自らをおき、自分たちの本当の姿を客観的に見ることができなかった私たちは、そこで自分たちの

ありのままの姿を見せつけられる結果となりました」（B 113P）とあるように、同志の自供問題を契機とした「軍事と政治の乖離」の深刻化である。

日本赤軍は、この同志の自供問題を「『隊内共産主義化』の問題の欠如、日常的な思想改造の組織化の不十分性」（B 115P）、すなわち、「隊内団結の非共産主義性」として総括し、自己批判―相互批判に基づいた「人間を第一とする思想」「日本人民を愛する思想」を獲得する思想闘争の重視として克服しようとしている。

我々もまた、我々自身の自白屈服の組織的原因の一つを、隊内思想闘争の軽視からくる隊内共産主義化の不徹底として総括している。しかし隊内共産主義化の内実については、日本赤軍とは見解を異にする。日本赤軍いうところの「人間を第一とする思想」が共産主義とは無縁のブルジョア思想であることは、すでに第四章で指摘した。「日本人民を愛する思想」なるものも、日帝本国人の歴史的現在の反革命性を免罪・美化する民族主義であることは、第一章が明らかにしている。つまり、日本赤軍いうところの「隊内共産主義化」とは共産主義とは無縁のものであり、従って日本赤軍いうところの「隊内共産主義化」の方向では、決して、帝國主義者どもと根源から対決することはできないと、我々は判断する。

いかなる理由があろうとも自白は許されない。いかなる

理由をもってしても自白を正当化することはできない。しかし、単に「人民を防衛する」とか「組織を防衛する」とかいう理由で完黙を確認しても、それだけでは組織員全員が完黙し得るとは限らない。単なる個的な決意のみでは、完黙を必然化し得ないということも、我々自身の自白屈服から学んだ教訓である。我々は、決して、完黙を兵士個々の決意のみにまかせることでことたれりとしてはならない。兵士全員が完黙し得る組織をこそ形成しなければならぬ。日本赤軍も「組織内における個々の弱さは、総体の弱さの反映としてあり」(B114P)と云っているが、この点に關しては正しい。

兵士全員が完黙し得るためには、帝國主義者どもに対する非妥協的な憤懣に裏打ちされた戦闘意志が組織としての戦闘意志にまで高められ、具体的プログラムに裏付けられた勝利の確信が組織としての確信にまで高められていなければならぬ。そして、組織としての戦闘意志、組織としての勝利への確信が、さらに個々の兵士に徹底し、組織と兵士が一体である時に、兵士全員が完黙し得るのである。これが我々自身の自白屈服から学びとった組織的教訓である。そしてこのような組織内実をつくり得なかつたことと、反日思想を個々の兵士が主体化し得ていなかつたこと、すなわち、そうし得なかつた隊内思想闘争の軽視が、個々の兵士の弱さを敵の前にさらけ出してしまい、そこを敵に突

かれ、ほぼ全員自白屈服という敗北をもたらしてしまったと我々は総括している。

それ故、我々にとつて自白屈服を組織的に克服する方向は、組織として、非妥協的な戦闘意志と具体的プログラムに裏付けられた勝利の確信を確立し、反日思想をより深化発展させ、それを個々の兵士に徹底する隊内思想闘争の展開である。この方向こそが、断乎、反日武装闘争を堅持しつつ、軍事至上主義を克服し、正しい軍事政治路線を獲得し得るのであり、日本赤軍の「人間を第一とする思想」とか「日本人民を愛する思想」とかという主観主義的ムード的な「隊内共產主義化」は、「軍事と政治の乖離」を克服するどころか、益々、拡大する結果しかもたらさないものである。

我々は、隊内共產主義を、未来社会の原基形態としての戦士共同体として指定し、その組織的保障を戦士の民主主義と規定する。この原理的立場こそが、軍事と政治、軍と党の二元論を止揚し得るのである。

第六章 日本赤軍から反日赤軍へ

「私たちは、私たち自身の敗北、連合赤軍や東アジア反日武装戦線、そして日本共産党の戦前戦後の敗北等、日本共産主義運動の敗北を自分たちの日常実践の中で総括してきました。」(A)と日本赤軍は云っているが、東アジア反

日武装戦線三戦闘部隊の「敗北」を、日本共産主義運動の敗北の範疇にとらえ込み、連合赤軍や日本共産党の敗北と並列することはできない、と我々は考えている。日本赤軍の、このような総括の仕方は、日帝本国内への、日帝本国人による反日武装闘争の登場の歴史的革命的意義を抹殺し、東アジア反日武装戦線の一連の戦いを、日本人マルクス・レーニン主義者の一國主義的左翼運動の中に、一つのエピソードとして埋没させてしまう危険性をもっている。

東アジア反日武装戦線の一連の戦いは、日本人民の一國主義的階級闘争の文脈においてではなく、先づもつて、東アジア諸国人民の反日武装革命史の文脈との関連で総括され位置づけられねばならず、その上で、日帝本国人がオノレの歴史的現在の反革命性を実践的に自己否定する戦いとして担ったという革命的意義が強調されなければならない。

日本赤軍は「勝利の源は階級的団結、その……」の中の『三、日本革命の歴史と私たち』という章で「日本共産主義運動」なるものの、皮相な総括を試みている。ここで日本赤軍は、いわゆる日本共産党風の「被植民地人民の戦いを抽象した日本人民中心史観」を基底に据えて、つまるところ日本共産党と同一の土俵で、「人間を第一とする思想」「日本人民を愛する思想」を基準にして、日本共産党や新左翼の不十分性なるものを指摘することで、日本赤軍の一國革命主義路線の正当化を試みている。日本赤軍の説によ

ると「人間を第一とする思想」「日本人民を愛する思想」こそ、マルクス・レーニン主義の革命的 세계観らしい。そして「人間を第一とする思想」「日本人民を愛する思想」である「マルクス・レーニン主義の思想で武装することが十分にしぬけないこと」(B145P)が、日本共産党や新左翼の不十分性ということにされている。それゆえ、日本共産主義運動の総括として、日本赤軍いうところの「マルクス・レーニン主義を発展させていくことを革命勝利の根幹」(B150P)という結論が導き出されている。

だが、我々は、マルクス・レーニン主義が、日本赤軍のいうように「人間を第一とする思想」「日本人民を愛する思想」であるか否かにかかわらず、マルクス・レーニン主義そのものの根底的批判こそ、世界革命勝利のための理論的前提条件の一つだと考えている。我々は、日帝本国内の革命闘争を重層重合的な共同体革命闘争史観を基底に据えた、日帝の侵略反革命史と東アジア諸国人民の反日武装革命史の弁証法を基準にして、なにゆえ日帝本国人「共産主義者」は、日帝本国人プロレタリアート・農民の反革命性を解体し得ず、なにゆえ東アジア諸国人民の反日武装闘争に呼応し得ず、なにゆえ日帝の侵略反革命を許してきたのかという観点から総括する。

「私たちは、革命の真理の前に自己を解体しつづけより客観的真理へと自己を組織することを自己批判と考えてい

ます。」(K 12 P)と日本赤軍は言う。だが「革命の真理」とは何なのだろうか? 「客観的真理」とは何なのだろうか? 自己解体自己批判の規準をどこにおくのだろうか? このことこそ先づもって明きらかにされねばならぬ。

日帝本国人が、その前で自己を解体しなければならぬ「革命の真理」、オノレをそれへ向けて組織しなければならぬ「客観的真理」とは、被侵略下原始共同体部族・被植民地原住民大衆の解放を根源的基軸の主体とした世界革命である。日帝本国人としての革命的自己批判とは、日帝本国人としての歴史的現在の反革命性を魂の奥底で自覚し、その反革命性を実践的に自己解体しつつ、その自己否定を民族性の止揚へまでも貫徹し、原始共産主義魂を学ぶことを通して、共産主義思想を魂の奥底に植えつけ芽吹かせ育てあげることである。そして日帝本国人としての実践的自己否定とは、被侵略下原始共同体部族・被植民地原住民大衆の戦いを戦闘指示として受けとめ、それに事実行為で呼応・合流していくことを通して、オノレを世界革命主体へと形成していくことである。

一九七二年五月三十一日付『赤軍からの宣言』は、「パレスチナの虐げられた友よ、この闘争は日本帝国主義者の黒い血にまみれた手で育った日本人民が……。勝利の日まで日本に住む朝鮮・中国人民に、さらに日本の中の第三世界を強制された沖縄人民と共通の敵の打倒において……」

反日赤軍への革命的飛躍・路線転換こそが、現在の内在的矛盾を根底的に解決する、と我々は確信をもって提起する。

〔付記1〕 われわれに対して、例えば「マルクス・レーニン主義を否定して、底辺主義や貧民主義に立脚して主観的な非合法組織に閉じ込めらるるならば現代ナロードニキ軍事に終わるのである。」(『蜂起』4691)「もし、爆弾の規模だけで評価を下せば東アジア反日武装戦線に……軍配が上る。しかし、この路線では階級深部の怒りを党として組織できない。」(『蜂起』4695)「『辺境人民と後進国人民にとって帝国主義国の労働者は資本家と同じように敵である』という主張まで生み出している。」(『蜂起』4696)「彼らの路線の本質は植民地人民の反日闘争に対する義勇兵というところにある。」(『赤報』4622)「もっぱら、ブルジョアアジアとプロレタリアートに対して共に階級的不信を表明するところの小ブルジョアアジアの立場を極限にまで急進化させた……」(同上)というような「批判」が寄せられている。「批判」は、要するに、われわれが「日帝本国人プロレタリアートを日本革命の主体として指定していない」という点にある。われわれはマルクス・レーニン主義者ではないことを決して隠しはしないし、はっきりと「先進国

(L 40/41 P)と宣言している。

ここでは、日帝本国人の反革命的犯罪性が自己否定的に自覚されており、日本人民よりも、在日朝鮮人・中国人・ウチナンチューとの結合が語られている。現在の日本赤軍には、ここで表出している革命的な思想はない。一九七二年5・30リッダ闘争以降の日本赤軍は、5・30リッダ闘争を発動した革命的感性・思想・路線からの後退であり、5・30リッダ闘争戦士への裏切りではないのか? 今の日本赤軍に問われているのは、まさに、日帝本国人としての自己批判実践として、被植民地人民の解放のために体を張って戦うという5・30リッダ闘争を発動した思想的原点への革命的復帰ではないのか?

77・5・30路線転換以降も、日本赤軍は、その内在的矛盾を何ら解決していない。5・30路線転換は、その内在的矛盾を、政治思想の一國主義性と具体的武闘実践の国際主義性との二律背反として、より純化している。日本赤軍は、軍事行動を積み重ねれば積み重ねるほど、その政治的理論的・上部構造と軍事的実践的・下部構造との矛盾を拡大していくかざるを得ないだろう。それは例えば9・28闘争の「人質」の位置づけをめぐる政治と軍事の先鋭な分裂・矛盾として表われている。

日本赤軍が、その内在的矛盾を革命的に解決する道は、反日武装闘争への路線転換以外にはない。日本赤軍から、

プロレタリア革命論」を否定する。本文においても展開したように、われわれは、「日本革命」を追求しているのではなく、世界革命そのものとしての反日革命を追求しているのであり、先ずもって、われわれ日帝本国人プロレタリアートは、帝国主義抑圧民族(帝国主義的寄生虫)であるという確認から出発しなければならないと考えている。そして、帝国主義抑圧民族である日帝本国人プロレタリアートは、帝国主義抑圧民族であるオノレの歴史的現在の反革命性を実践的に自己否定することを通してのみ、みずからを世界革命主体として、形成し得るという観点に立っている。われわれは、「日帝本国人プロレタリアートを先ず日本革命の主体として形成し、日本一國の権力奪取の後に世界革命主体に転化する」という一國革命主義を否定し、革命闘争の出発点から、反日思想を媒介として、日帝本国人プロレタリアートを世界革命主体として形成することを追求する。われわれは、日帝本国人プロレタリアートを日本革命の主体として指定することを否定するのみならず、「日本革命」という枠組自体否定する。しかし、われわれのこの路線的立場は、日帝本国人プロレタリアートに対するムード的不信感を根拠としたものではなく、日帝本国人プロレタリアートが歴史的現在の帝国主義抑圧民族であるという客観的存在論(単に排外主義イデオロギーにおかされているということではない)を根拠としている。われわれ

は日帝本国内の世界革命主体を反日兵士大衆として指定する。そして、われわれは、日帝本国人プロレタリアートの中から必ず反日兵士が生まれてくるということに絶対的、確信をもっている。日帝本国人ブルジョアジーに対しては被支配者であり、被植民地人民に対しては支配者であるという存在論的矛盾こそ、日帝本国人プロレタリアートが反日兵士へと志願する論理的根拠であり、日帝の侵略反革命史と日帝本国内外の反日武装革命史の弁証法こそ、その物質的根拠である。それ故「日帝本国人プロレタリアートの中から反日兵士は生まれない」とか「反日武装闘争では日帝本国人プロレタリアートを革命主体として組織できない」という人々こそ、実は、日帝本国人プロレタリアートに対する裏返しの不信心をもっているのである。われわれが敢て、日帝本国人プロレタリアートを、帝國主義的寄生虫であると比喩的に規定するのは、日帝本国人プロレタリアート総殲滅というテーゼをひき出すためではなく、日帝本国人プロレタリアートが反日兵士へと転生するための自己否定をすみやかに発動させるためのつきつけとして、である。

〔付記2〕 一國革命主義・一國社会主義・寄せ集め世界革命V路線の否定の上に立つて、われわれが構想している根源的世界革命、すなわち永続的世界共產主義革命の永続性V世界性V共產主義性Vは何によって保障されるのか？ それは、被侵略下原始共同体部族・被植民地

共產主義性Vを具体的に確保するのである。一國革命主体をもつてする、民族廃絶の方向をもたぬ社会主義の、民族国家の枠内での建設を自己目的化する一國革命主義・一國社会主義・寄せ集め世界革命V路線が、程度の差の違いはあれ、スターリニズムの迷路にはまり込み、固益至上主義の立場から、根源的世界革命に敵対し、社会帝國主義に転落することは、一九一七年以降の歴史が示している。そもそも、一方で被侵略下原始共同体部族が種族絶滅の危機にさらされ、被植民地原住民大衆が大量に飢え死にしつつある時、他方でブルジョア的物質生活の一國的上をもつて社会主義の勝利と称している社会主義などは、全世界共產主義全人類共同体の建設の方向とはまったく無縁であるばかりではなく、敵対するものなのだ。根源的世界革命の方向性をもたず、とりあえず、一國の植民地革命を成し遂げ「部分的勝利」を克ち取った一國革命主体がなすべきことは、すみやかに、一國革命主義・一國社会主義・寄せ集め世界革命V路線を放棄し、根源的世界革命の路線を獲得することによって、自らを世界革命主体へと転生させ、民族国家を否定する方向で、解放された大地を根源的世界革命の根拠地へと転化させつつ、過渡期人類共同体の表体として生み直すことであらう。

〔付記3〕 日本帝國撃滅の暫定的プラン

△第一期V 日帝本国外の反日武装闘争（主要には東アジア

原住民大衆の解放を、われわれが主体的に発動する革命闘争の主軸に据えること、帝國本国人はオノレの歴史的現在の反革命性の自己否定をもって彼らの戦いに合流すること、そして搾取階級制と民族国家との否定の上に立った過渡期人類共同体の建設↓それ自体の止揚を媒介的に經由して、全世界共產主義全人類共同体を建設することを戦略目的としていることである。すなわち、△帝國本国人植民地Vの階級闘争の止揚を、帝國主義侵略勢力と被植民地原住民勢力との対立闘争によって制約し、その総体を原始共產圏と文明圏との対立闘争の止揚によって制約し、民族国家の否定（階級の廃絶のみならず民族の廃絶もめざす）を前提として世界共產主義社会を建設することを戦略目的とする時、われわれは、われわれが主体的に発動する革命闘争の永続性V世界性V共產主義性Vを原理的に確保することができるのである。そして、①「一國革命主体↓世界革命主体」ではなく、はじめから世界革命主体の形成をめざす運動論 ②一國內部で民族的に分隔固定化された主体の一國主義的結集を軸とするのではなく、民族的分隔固定化を自己否定的に解体し、国境を越えて、世界革命主体の国際的結集をめざす組織論 ③戦略・戦術の基本を一國的情勢分析から立てるのではなく、人類世界史の三層構造の総体把握を基底にし、世界過渡期論を基準にした世界帝國主義分析から立てる世界革命戦略論が、△永続性V世界性V

△諸国人民の△に事実行為で呼応する日帝本国人の反日武装闘争の開始↓日帝本国内における東アジア反日武装戦線の形成

△第二期V 日帝の新植民地主義侵略と戦う△東アジア

世界Vの人民の反日武装闘争への戦闘呼応を通じて、日帝本国内の革命と反革命との対立闘争、すなわち世界帝國主義の矛盾を総体として激化させつつ、それを背景として、日帝本国人プロレタリアートを、反日思想を媒介として世界革命主体へと形成し、東アジア反日武装戦線への志願・結果を促し、国外の世界革命派との共闘関係をつくり出し、世界革命△党△軍Vの建設を展望する。

△第三期V 日帝本国内の反日武装闘争の激化↓世界帝國主義の根底的危機（この過程で△東アジア

世界V諸国のいくつかの反革命政権は打倒される）によって、日帝の政治経済的危機がひき出され、日帝本国人の革命派と反革命派への分岐がより先鋭化・拡大し頂点に達する↓世界革命戦争の国際的連関としての本格的内乱内戦状態に突入。反日都市ゲリラ戦と反日大衆武装蜂起の結合。国外反日革命軍の上陸。

△第四期V 東アジア反日武装戦線を革命権力に発展させ、

最終決戦に突入。

△第五期▽

日帝権力（警察・軍隊・監獄・政府・官僚機構）の打倒・解体・掃滅→勝利→東アジア反日武装戦線を核とした反日兵士大衆による革命的独裁の樹立→日本国家の廃止（日帝の滅亡）と反日共同体の樹立を宣言、アイヌ・ウチナンチュ・在日朝鮮人・在日中国人の同志たちもそれぞれ別の共同体樹立を宣言。東アジア地区で解放された各共同体は、世界革命評議会（東アジア地区）を形成する。

【引用出典目録】

- A — 「日高隊声明」（『人民新聞』昭和302 77・10・15付）
B — 「勝利の源は階級的団結、その保証は思想闘争」（『団結をめざして』）
C — 「団結をめざし、団結を求め、団結を武器としよう！」（『団結をめざして』）
D — 「同志奪還闘争への意見に込めて(5)」（『人民新聞』昭和326 78・6・25付）
E — 『赤軍』ドキュメント
F — 『人民新聞』昭和316 78・3・15付
G — 「パレスチナ民主国家とは何か」（『アラブゲリ

ラと世界赤軍』）

H — 「あすのパレスチナ——アル・ファタ」（『アラブゲリラと世界赤軍』）

I — 「PFLP 綱領的文章」（『アラブゲリラと世界赤軍』）

J — 「同志奪還闘争の軍事的勝利を思想的団結へと前進させよう」（『現代の眼』78年3月号）

K — 「団結をめざして」まえがき
L — 『日本赤軍宣言』

M — 『赤軍』パンフ昭和4

N — 「同志奪還闘争への意見に込めて(1)」（『人民新聞』昭和322 78・5・15付）

O — 「同志奪還闘争への意見に込めて(2)」（『人民新聞』昭和324 78・6・5付）

《緊急アピール》

東アジア反日武装戦線・KF部隊（準）は、去る三月一九日の、未知の同志たちによる東レ海外事業担当重役斉藤光豊宅に対する攻撃を、心からの喜びをもって、断乎として支持することを表明する。

一九七八年五月十七日、中米エル・サルバドルの都市ゲリラFARNは、東レ、蝶理、三井物産、岐染の出資からなる多国籍侵略企業インシンカの社長松本某を捕捉し、同人の釈放と交換に、ロメロ軍事独裁政権下の獄中にある同志たちの解放などを要求した。そしてFARNは、スウェーデン系、オランダ系の多国籍侵略企業の重役、英系多国籍侵略銀行の代表を相次いで捕捉した後、同年二月七日、再びインシンカの重役鈴木某を捕捉し、同人の釈放と交換に獄中の同志たちの解放などを要求した。

FARNの、これら一連の多国籍侵略企業の重役を捕捉する作戦は、各作戦の後に公表される宣言に明らかなごとく、FARNが多国籍侵略企業に対する攻撃を通して、米帝・日帝を軸とする世界帝国主義と、世界帝国主義に支えられたロメロ軍事独裁政権を打倒せんとしていること、そしてそのためには共通の敵と対決している被植民地人民、とりわけ中米のニカラグア、グアテマラ人

民との団結の強化をめざし、国境を超えた統一革命をめざしていることを明らかにしている。

エル・サルバドル人民は、隣国のニカラグア・グアテマラ人民とともに、米帝反革命軍勢力を後盾とした苛酷な抑圧支配の下で、少数の地主階級と米帝、日帝など多国籍侵略企業に収奪され続けている。

そして、エル・サルバドル人民を収奪している多国籍侵略企業の筆頭がインシンカに他ならないのである。それは何よりも、FARNが二度にわたってインシンカの日本人重役を捕捉していることによつてあきらかである。

この連続的な日本人重役捕捉作戦は、われわれ日帝本国人民に対する「戦闘指示」つきつけである。すなわち、ロメロ軍事独裁政権を援助してエル・サルバドル人民を具体的に抑圧し、そしてエル・サルバドル人民に低賃金労働を強制して収奪しているインシンカ——東レ・蝶理・三井物産・岐染を、日帝本国において攻撃せよ、という「戦闘指示」つきつけであるのだ。

われわれは帝国主義本国人民が総体として被植民地人民に対する支配者であり、収奪者であり、被植民地人民に対する寄生虫的な存在であることを確認しなければならぬ。われわれの、「物質的に豊かな」日常のすべて

が、直接的、間接的に、エル・サルバドル人民をはじめとする被植民地人民に犠牲を強いている結果として保障されていることを確認しなければならぬ。

われわれは以上のことを確認し、FARNからの「戦闘指示」につき「に具体的に応えなければならぬ。われわれは、日帝企業の新植民地主義侵略、支配を容認することによって、被植民地人民に敵対し続けてはならない。帝国主義本国としての反革命性、寄生虫性を自ら解体し、否定しなくてはならない。そして、それは、日帝本国において侵略企業中樞を武装攻撃して物質的、実体的なダメージを与え、新植民地主義侵略、支配を許さない戦いを主体的に担うことによってはじめてできることなのである。

同志、友人諸君！

FARNをはじめとする被植民地人民の反世界帝国主義、反日、の戦いに日帝本国の政治、経済、軍事中樞を武装攻撃する事実行為で呼応し、その呼応する戦いで、被植民地人民と共に合流しよう！

東レ・榮理・三井物産・岐染をはじめとする全ての侵略企業中樞を繰り返し、執拗に攻撃しよう！

さらなる戦闘を慎重に、細心に準備し、中樞セン滅戦を大胆に戦い抜こう！

反日武装闘争の勝利に確信をもって、共に戦かわん！

一九七九年三月二三日

東アジア反日武装戦線・KF部隊（準）

【東京地裁刑事事五部ミノハラは、毎回の「法廷」で強権的訴訟指揮を発動している。われわれは、ひとつづきの戦場である監獄と裁判所においても原則的に反日闘争を闘い抜いている。「傍聴」・カンパを含む、あらゆる形態での共闘を！！獄中——法廷内闘争支援のために「公判資料」（腹時計VOL 1のコピー、「公判」ニュース等）を必要とする友人は、KQ通信社に問い合わせてほしい！】